



MASQUE

～怪盗タバン・2

2009.04.06

春の花々が咲き乱れている nazuna 館。

古いお城を そのままギャラリーとして使っている nazuna 館には、
店主の作品たちのほか、
古くからの さまざまな美術品も 展示されています。

nazuna 館は、毎日 多くのひとで 賑わっていました。

nazna 館を訪れる誰もが、大広間に入るなり、まずは
よく磨きこまれた ブロンズ像に、感嘆の声を 上げます。

それは、『自由を謳歌する』というタイトルの、
とても美しい ブロンズ像でした。

観客たちの賛美の声に、彼は、
ほんのわずか、気づかれない程度に 頬をゆるめ、
彼の信奉者に 微笑みかけます。

そんな 彼の笑顔の波動は あっというまに 観る者の心に伝わり、
彼のファンは ますます 増えるのでした。

そして、大勢の観客に囲まれることが 彼の喜びでもありました。

次に 観客が 目を奪われるのは、
大広間の壁に掛けられた 1枚の大きな絵でした。

この絵は、見る角度によって、
まったく 違う絵となって ひとびとの目に映り、彼らを 魅了します。

それどころか、この絵は、
見る角度だけでなく、見るひとによっても 違う姿を 映し出しました。

たとえ 同じ角度から見たとしても、
見るひとによって、なぜか 違う絵に 見えるのです。

そして また、
まったく同じ角度から、同じひとが 覗きこんだとしても……

そのときどきによって、
さらに また 違う絵へと 姿を変えるのでした。

彼女は、'だまし絵'と 呼ばれていました。

ブロンズ像と並ぶ人気を誇る彼女には、悩みが ありました。

いくつもの顔を持っていることで、
常に 自分の中に 穏やかならぬものを 感じていたのです。

「そのときどきによって 違う姿に見える」という性質は、
彼女の 美術品としての評価を高める要素にはなるかもしれませんが。

が、彼女自身にとって、数多くの顔を抱えていることは、
自分の中の分離感を 強めることにほかならないのでした。

わたしの 本当の顔は、どれなんだろう。
どれもが、わたしの本当の顔では、ない。

どれもが 偽りの顔であるならば、
わたしは みんなを だましていくことになる。

みんなを だませているならば、
'だまし絵'としては 大成功といえるでしょう。

それなのに。

美術品として、ということ以前に、
ひとつの、この世に存在しているものとしての存在価値を、
自分自身に 見出すことができない。

くるくると変わる外見と同様、自分の存在までが、
定まらない、嘘のものであるかのように感じられて
しかたがない。

彼女は ひそかに、そんな鬱屈した想いを つのらせていたのです。

夜になりました。

大広間のシャンデリアに 灯りがともると、
いつものように、美術品たちは ポーズを崩し、歩き回り始めました。

ここ nazuna 館では、
美術品たちは、本当は、誰でも 自由に 動くことができるのです。

ただし、それは 夜の女王が 古城を支配している間だけ。

観客のみなさんを 驚かせてはいけませんから、
美術品たちは、昼のあいだは じっと 我慢しています。

適当に 息抜きしながらも、
普通の美術品を装い、静物としての それぞれの役を 演じているのです。

が、あたりが 暗くなり、
大広間のシャンデリアに 金色の灯りがともるのを 合図として、
彼らは、本来の姿に戻り、思い思いの時間を 過ごすのでした。

そんな 不思議な nazuna 館で、夜になると いちばん元気になるのは、
みんなの人気者、ブロンズ像でした。

『自由を謳歌する』というタイトルの通り、
彼は、自由に、楽しく 生きることを 信条としていました。

彼は、夜の帳が降りると同時に、
地下から 年代もののワインを 樽ごと 担ぎ出してきました。

そして、グラスを片手に、あちらこちらへと 顔を出し、
城内を 盛り上げて回るのでした。

その日も ひとつおりの 城内を回り終えた ブロンズ像は、
大広間へ戻ってくると、窓際にたたずんでいる 'だまし絵' のもとへ
やってきました。

彼女は、じっと窓の外の暗闇を見つめ、なにか考え込んでいるようでした。

僕も、そう思っていたよ、ずっと。

ブロンズ像は、背後から そっと 声を掛けました。

その言葉には 驚いたものの、
彼が 近づいてきていることは、窓ガラスに映って 知っていたので、
'だまし絵' は、黙って 次の言葉を 待ちました。

僕は、矛盾が許せなかった。
だから、矛盾がないように、と、自分に厳しく生きてきた。

理想と現実は、違うさ。
だけど、常に理想を追い求めて、やってきたんだ。

世の中には、いろんなやつがいる、ってことも、わかってる。

でも、それでもやっぱり、矛盾したことを言っているやつ、
言っていることとやっていることが違うやつを見ると、
腹が立っていたんだ。

ましてや、自分自身の中に矛盾を発見したときは、
それはもう、やりきれない気分になってしかたがなかったよ。

ブロンズ像もまた、'だまし絵'と目を合わせることなく、
ガラス窓の向こうに広がる暗闇をじっと見つめました。

ふたりの間は、沈黙の闇という鎖で、
しっかりとつながっていました。

たとえばさ、'なまこの親分'が、玄関先にいるだろ？

'なまこの親分'とは、通称です。

本当は、著名作家の手によるとても高価な御影石の彫刻なのですが、
どっしりとした重厚感あふれる容姿から、館内では、親しみをこめて
'なまこの親分'と呼ばれているのです。

'なまこの親分'は、そのとき そのときで言うことが違うんだよ。

まったく同じものに関して、
きのうと今日とでは正反対のことを言うんだぜ？
ありえないよ。

あるとき、僕は 言ったんだ。
「それ、矛盾してるだろ!？」って。

いままで散々、ころころ変わる親分の言うことに
振り回されてきたからね。

ところがさ、親分は、マジメな顔をして、言うんだよ。

「どっちも、本当だ」

ブロンズ像は、顔をしかめながらも、笑いました。

僕からしてみたら 矛盾のカタマリなんだけど、彼は 彼で、
「どっちも、嘘じゃない。矛盾なんか していないさ。
どっちも、そのときは 本当に そう思っているんだ」
って 言うんだよな。

正直なところ、
そういう感覚の持ち主がいる、ってことが、ショックだったよ。

それは、'だまし絵'にとっても、衝撃的なことでした。

「どっちも、本当。」

それは、彼女の中では、思いつくことすらなかった言い分でした。

彼女は、くるくる変わる自分自身のどれを信じていいのかわからなくて
長い間 苦しんでいたのです。

それなのに、
くるくる変わることを「どっちも、本当」と 言い切る者がいる。

それは、ブロンズ像同様、'だまし絵'にとっても、
自分の価値観が ひっくり返されるような
衝撃的なことだったのでした。

'だまし絵'は、心の動揺を隠しながらも、
ブロンズ像を真似て、顔をしかめつつ 笑ってみました。

ガラス窓を通して、暗闇も 不確かな顔で 笑いました。

実は、君のことも、苛立たしく思っていたときがあったよ。

ブロンズ像は、ガラス窓の向こう側の闇から 目を離すと、
'だまし絵'の方へ 向き直りました。

君は、'だまし絵'だろ？

見るひとによって、角度によって、時間によって、
ころころと姿を変えるだろう？

そんな君に対して、
「自分というものが ないんじゃないのか？」「一貫性がない」
って、腹立たしく思っていたことも、あったよ。

'だまし絵'は、返す言葉が ありませんでした。

自分の中に ずっと押し込めてきたものを、
いま、ブロンズ像が、目の前に 広げてしまったのです。

なにも言うことができず、大きく目を見開いて
涙がぽろぽろとこぼれおちてくるままになっている `だまし絵'に、
ブロンズ像は 言いました。

だけどさ。
どれも、ほんとなんだよ。

ブロンズ像は、
涙であふれる 彼女の瞳を しっかりと とらえました。

どの顔も、みんな、君の本当の顔なんだよ。

ガラス窓の向こう側から、
大きな大きな暗闇が 音も立てずに 立ち上がり、
窓辺のふたりに 覆いかぶさろうとしていました。

`なまこの親分'の 言う通りだ。
矛盾なんかじゃないんだ。

君を見ていて、それが わかったよ。

その瞬間、その瞬間。
どれもが、本当のことなんだ。

すべてが、そのとき そのときの、
君の真実の姿なんだよ。

…少なくとも、いまは、僕は そう思っている。

大広間のシャンデリアが 軽く揺れ、
それまでの金色の灯りが、とつぜん、銀色の光の集合体に 変わりました。

さらさらという 衣擦れの音とともに、
磨きこまれた 銀製の大きな鏡の奥から、
nazuna 館の店主が ひっそりと 姿を あらわしました。

店主は、'だまし絵'の前まで やってくると、
羽毛で出来た 小さな箒で、表面の埃を払うふりをして、
'だまし絵'の頬の涙を 優しく 拭いました。

あなたが、いつ、どんな姿に変わるのか、
わたしにも、わかりません。

だけど、彼の言うことは、本当です。
どれもが みな、真実。

あなたが、いつ、どんな姿を 映してみせようとも、
そのどれもが、あなたの本当の姿なんですよ。

そして、'だまし絵'に、リボンのかかった小さな箱を 手渡すと、
また 鏡の奥へと 消えていきました。

銀色の光の帯が すっと消え、
大広間のシャンデリアは、ふたたび 金色の灯りに 戻りました。

窓際まで 迫っていた暗闇は、
いつしか 庭先にまで後退し、その巨体を ひっそりと横たえていました。

nazuna 館に、また 朝が やってきました。

まもなく 開館の時間です。

美術品たちは、それぞれのポジションへ戻り、
いつものように 澄ました顔で、ポーズを とりました。

‘だまし絵’は、身支度を整えると、
ちらり、と 視線を 胸元へ 走らせました。

そこには、
大きな天然石と銀粘土細工の美しいネックレスが 輝いていました。

きのう、店主から手渡された小箱に入っていたものでした。

その天然石は、
光の入る角度によって、微妙な色のグラデーションを 奏でます。

きらきらと輝きながら、
そのときどきで、さまざまな表情を 見せてくれるのです。

まるで、‘だまし絵’の長年の思いを包み込み、
昇華させていくかのよう。

‘だまし絵’は、その心地よい光の中で、
あふれんばかりの七色の煌きに、うっとり と 身をまかせていました。

これと 同じなんだよな、僕たちも。

いつのまにか 隣に立っていた ブロンズ像が、つぶやきました。

生きている限り、
さまざまな光を受けて、変わり続けているんだ。

そのとき そのときで 違うことを、
僕たちのようなタイプは、矛盾とを感じるかもしれない。

でも、どれもが、本当なんだ。
存在としては、ひとつなんだね。

この 白い石のように。

‘だまし絵’は、微笑みながら、ブロンズ像の言葉に うなずきました。

大広間の扉が、ギーッと 音を立てて 開きました。

どうやら、本日のお客さま、第1号のようです。
今日も たくさんのひとたちが nazuna 館 に やってくるのでしょう。

さっと 元の位置に戻ったブロンズ像は、いつもの通り、
賛美の声を浴びせかける観客たちに
魅惑の微笑みを 投げ返しました。

そして そのあと、鏡に向かって、そっと 片目を つぶりました。

「あ！ あっちに、大きな絵があるよ！！」

家族連れが、‘だまし絵’を 見つけたようです。

店主の はからいにより、今日の'だまし絵'は
大きな鏡の正面にある壁に 掛けられていましたので、
彼女は、自分の姿を 鏡に映して見ることができました。

七色の光が 鏡に反射しては、また 舞い戻り、
部屋中に きらきらと 美しい輝きを ばらまいています。

磨きこまれた 大きな銀の鏡に 映っているのは…

ブルームーンストーンのネックレスを 胸元に揺らして
ちょっと照れくさそうな顔で微笑んでいる、
怪盗タバンの肖像画でした。